

後 論

以上検討を重ねてきたところから、進んではあるが、幕末における洋式技術の導入過程とそれが在来技術に及ぼした影響を、一応明らかにすることのできたと見うので、最後にこれまでの叙述を要約して結論にかえることにしたい。

- 1) 近世の造船は、通説のように低性能・脆弱な船でなく、頑帆船にしては航走性能もよく、経済性の高い実用動力船であった。また近世に多発した海難も、就帆船隻の多さと日本近海の過酷な自然環境を抜きにしては考えられない。
- 2) 幕府が近世初期にとった造船制限策は諸大名の永年力抑制を目的としており、領国のために行われた制限が造船に課せられた形跡は見えない。

しかし、18世紀末頃から兩次諸国の通商

毎年旧暦丑の日の観望を鶴巻外にした誤説で、
建船図儀史料などの一次史料に拠れば、こ
れらの航法本格的な洋式操法をとり、矢用
上も問題にはなかつたのである。従つて、本
造帆船に因する限り、航法の技術にはさし
たる懸隔はなく、鎖国下に蓄積された技術
で十分に洋式航法をこなせたのであつた。
鎖国により造船技術が衰退したとする見方
は反論と云ふまでもない。

